

中部の

エネルギーを 築いた

人々

大同特殊鋼・東海カーボンの創業者 寒川恒貞

～電気主任技術者から事業家に転身～

寒川恒貞の前半生は、電気主任技術者、技師長を経て草創期の水力発電事業家として知られた。そして1913年(大正2)、名古屋電灯(株)の顧問となり、その翌年アメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェイなどの電気事業・電気化学工業などを視察した。

福沢桃介は海外視察から戻った寒川に、「名古屋電灯には今、水力が5,000^{キロ}余っている。1^{キロ}5厘でもよいかから、このさい何か利用法を考えて貰いたい」と命じた。この要請が、寒川の後半生を大きく変えることになった。その後、電気製鋼事業・電極事業などの会社を設立し華々しく活躍した。



寒川恒貞
(『寒川恒貞自伝』より)

電気事業の電気主任技術者、技師長時代

寒川恒貞は1875年(明治8)、現在の香川県高松市に生まれた。1902年(明治35)、京都帝国大学電気工学科を卒業し、大学院に進んだが翌年退学した。そして、次のような電力会社を遍歴し、多くの業績を残した。

(1) 深川電灯(株)時代(明治35年から36年まで)

主任技師として、当時、直流が多かった電灯敷設工事を交流で行い注目された。

(2) 川越電気鉄道(株)時代(明治36年から39年まで)

主任技師として、電力供給設備に国産の芝浦製作所製を採用した。当時、我が国電気技術者の中心的存在であった芝浦製作所の岸敬二郎が技術顧問の要職にあった。

(3) 箱根水力電気(株)時代(明治39年から42年まで)

主任技術者として、箱根塔の沢に早川水力発電所(出力:4,000kVA)を1909年(明治42)完工させた。これを電気学会総会の席上、「箱根水力電気株式会社工事概要」として講演した。

また、箱根塔の沢から横浜保土ヶ谷まで、特別高圧46,000Vで送電。初めて国産技術の送電鉄塔(石川島造船所製)、電線(住友伸銅所製)や三重ガイシ(米国トーマス社及び日本陶器会社製)を採用し、一躍有数の電気技術者として紹介された。

(4) 徳島水力電気(明治42年から43年まで)・ 四国水力電気(株)時代(明治43年から昭和12年まで)

徳島水力電気の技師長として、吉野川水系祖谷川に三縄水力発電所(所在地:徳島県三好郡三縄村・出力:200kW)の建設を計画した。そして福沢桃介の資金協力を得るため、1910年(明治43)増資して、四国水力電気を創立し、完成させた。その後、監査役、取締役を経て1924年(大正13)から1928年(昭和4)まで社長、昭和12年まで取締役を務めた。

後半生の電気製鋼事業・電極事業

福沢桃介と寒川恒貞との関係は、芝浦製作所の岸敬二郎を通じて始まった。岸は「両人

と一緒にやったら面白い仕事ができる」と考え、二人を引き合わせ、福沢は寒川が自分の計

画に参画することを求めた。ここに、福沢の将来を見越した独創的な考えと寒川の科学的技術を基にした堅実果敢な事業家が実現した。

寒川は福沢の要望にこたえ、

- ①電力を大量に消費し、将来の発展性ある事業を選択する。
- ②その結果、有望業種としてアルミニウム工業、製鉄・製鋼事業、曹達工業の3事業を取り上げる。
- ③上記3業種のうちのどれに着手すればよいかについて、文献や各方面の専門家の意見を参考にして結論を絞っていく。

という考え方をまとめた。そして、まず製鉄・製鋼事業を実現化していった。

(1)電気製鋼事業(現在：大同特殊鋼株式会社)

名古屋電灯(株)は、1913年(大正3)、製鋼部を設置し、熱田火力発電所の隣で電気製鋼の研究を始め、1915年(大正5)に(株)電気製鋼所として独立させた。寒川は600kWの合金炉と1.5トンのアーク炉の設計に着手、合金炉の完成を待ってフェロシリコンを生産、翌年、アーク炉1基が完成し炭素鋼の試作が開始された。この炉体は、我が国最初のアーク炉で、現



電気製鋼所 熱田工場(大正5年8月)
(出典：『大同製鋼50年史』)



電気製鋼所 福島工場(大正8年2月)
(出典：『大同製鋼50年史』)

在、大同特殊鋼知多工場に社宝として保存展示されており、1983年(昭和63)、米国金属協会から歴史的遺産(Historical Landmark)として認証された。さらに2007年(平成19)に経済産業省より近代化産業遺産の認定を受けた。

その後、電気製鋼所は、1919年(大正8)に木曾福島工場を操業させ、1921年(大正11)(株)大同電気製鋼所とし、寒川が社長に就任した。大正13年に大同製鋼(株)と社名を改称した。そして1976年(昭和51)、日本特殊鋼、特殊製鋼との3社合併で大同特殊鋼(株)となり、現在特殊鋼で世界一のメーカーになった。

(2)電極事業(現在：東海カーボン株式会社)

当時、東海電極(株)の製鋼用電極及び電解ソーダ用電解板については米国アチソン社製品に依存していた。このため、寒川は炭素製品の需要拡大を予想して、独自に構想を立て、計画を立案し、福沢の同意を得て、自らが出資者の中心となって創立し、東海電極は炭素製品メーカーとして大きく発展した。

1975年(昭和50)、カーボンブラックを始め電極以外の製品も多くなり東海カーボン(株)に社名を変更した。



創業時の東海電極製造(大正7年4月創設)
(出典：『東海電極製造35年史』)

(3)その他の事業

寒川の後半生は、電気事業の経営から少し距離を置き、1925年(大正14)に東洋刃物株式会社を創立し取締役社長に就任。1934年(昭和9)に日本アルミニウム株式会社の設立発起人、1935年(昭和10)に電業社原動機製造所取締役社長、1939年(昭和14)に東京機械工業株式会社社長などに就任したが、終戦の1940年(昭和20)に71歳で没した。

(寺澤安正)